皮膚科医、息子の包皮を切る

k o d o m o z u r u m u k e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
皮膚科医、息子の包皮を切る

【Ｎコード】
Ｎ１０３２Ｐ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
小学校６年生の雄太が、両親に真性包茎の手術を課されるシーンです。

２０××年が明けた。夫が皮膚科、妻が小児科の医師という青木家は小さいながら開業しており、商店街の中にある自宅の１階で青木医院を営んでいた。正月３日間は病院も休みであるが、今日は灯りがともっていた。白衣姿の夫婦が見守る中、処置用のベッドには下半身裸になった長男の雄太が仰向けになり、不安そうな目つきをしていた。夫婦は雄太の包茎手術をするかどうかで話し合いをしているのだ。雄太も小学校６年生、春には地元の中学校へ進学する。

雄太が真性包茎であることに両親が気づいたのは４年生の時である。風呂場で母が剥こうとしたのだ。真性包茎だと知った母は即座に手術をすることを提案した。真性包茎は病気であるから治さなければいけない、やるなら早いほうがいいという考えだった。しかし父は難色を示した。この時期に手術をして亀頭が露出してしまうと雄太がいじめられるかも、と思ったのだ。実は父自身、小学校２年生の時に亀頭包皮炎になり、有無を言わさず手術を受けさせられ亀頭が露出してしまった。それからというもの、プールや林間学校で友人からからかわれることが多く、小学生時代は大分苦労した。同じ思いを息子にさせたくないと考えていた。最初、母から手術すると言われて雄太は泣いた。手術も怖かったし、自分だけ性器の形が友人と違うものになることは怖かった。

それから両親は何とか真性包茎を治そうと試みた。風呂に入った時、少しずつ剥こうとした。痛がって泣いても容赦はしなかった。包皮口に軟膏を塗りこむなど処置も行った。雄太自身も手術が嫌だから、何とか剥けるように頑張っていたが、どうしても痛くて最後まで剥くことは出来なかった。夏休み、ついにしびれを切らした母は金属製の器具を雄太の包皮口に強引に差し込み、拡張させた。金属の器具はヒンヤリとしてぞくぞくした。中に入れては広げることを繰り返していった。雄太のペニスからは血が出始め、泣いて暴れようとしたが母は容赦しなかった。一応真性包茎は治ったのである

が、それでも手で剥けるようにはならなかった。小学校最後のプールの授業も終わり、中学入学が迫ってきた正月、母は再び手術を提案した。

　これからも剥けそうな気配がないとは雄太もわかっていた。またあの痛い器具を差し込まれるのも嫌だし、毛も生え始めた性器を母に見られるのはそろそろ嫌だった。しかしだからといって手術を受ける覚悟が決まったわけではない。手術については一貫して断固拒否という意思を伝えていた。

　仰向けに寝ている雄太のペニスを手でつまみ、母は力をこめて包皮を剥こうとした。やはり途中でとまってしまう。まだ小ぶりな性器ではあるが、５ｃｍほどに成長していた。その先端１ｃｍは皮だけの部分が朝顔の蕾のごとく閉じていた。「お父さんどうします？」との声に、今度は父が性器を調べた。雄太は父に助けを求めるような目で哀願した。しばらく沈黙があった後、父は静かに切り出した。

「もう中学生になるからな。いつまでもこのままというわけにはいかないし、中学生になれば剥けてる友達も出てくるだろうからからかわれる心配もないだろう。いい機会だからやっておこう」

「嫌だ～」と泣き出す雄太にかまわず、母は手術道具を手際よく並べた。準備が整うと「お父さん、お願いします」とだけ言って雄太の上半身を押さえつけた。父は注射器を手に取ると包皮の中に針を差し込んで麻酔を打った。「痛いよ～」と更に泣き出す雄太であるが、両親は顔色一つ変えず淡々とこなした。麻酔が効くまで数分間かかる。

　麻酔が効いたことを確認すると父はハンドメスを手にとり、包皮をつまんで腹側の一箇所に切り込みを入れた。手術すると決めた以

上、父も容赦せず包皮を切っていく。一気に血が噴出し、処置台のシーツを赤く染めた。２０分後、雄太の亀頭は全て露出していた。最後にしっかり縫合して手術は終わった。雄太はずっと泣き続けていた。手術が終わると母が処置を代わり、血が付着した雄太の亀頭に包帯をしっかりと巻いた。上半身が自由になった雄太も上体を起こし、完全露出してしまった自分の亀頭を見つめた。

学校が始まるまでの数日間は安静である。卒業までの2ヶ月、クラスメイトに手術や亀頭が露出したことを知られてはならない。出来るだけ学校でトイレに行かないようにしよう、行くときも極力同級生が使わないトイレを使用して便器にピッタリくっついてしようと心に決めた。そして中学に入ってもしばらくは手術したことが誰にもばれなければ良いなとひたすら願っていた。今まで包皮で守られ続けていた亀頭はいきなり外からの刺激を受けることになり、しばらくはこすれる痛みがありそうだ。